共十二

十二源氏袖流

三

源氏袖抄第三

并きもつむ花　四
みちの笑　五
花のえん　六
あふひ

三ノ目

乾坤

源氏

并末摘花

源氏ハタヽかの方ハ
ゆのこゝろにくくはしかりけるうへにあ
はれなるこゝろはせもあるなんとおもひ
ゐたりハ世のつねの女にはあらぬものを
ゆかハ古堂塗乃家のとなりにはあらぬ
ものをとおもひよりけるなりけ
れとめくらかそきさ海そのうへの松也
中納ことのきんとをつくしてとゝせい
源氏ゆのなりて今ひとくさやうそあんん

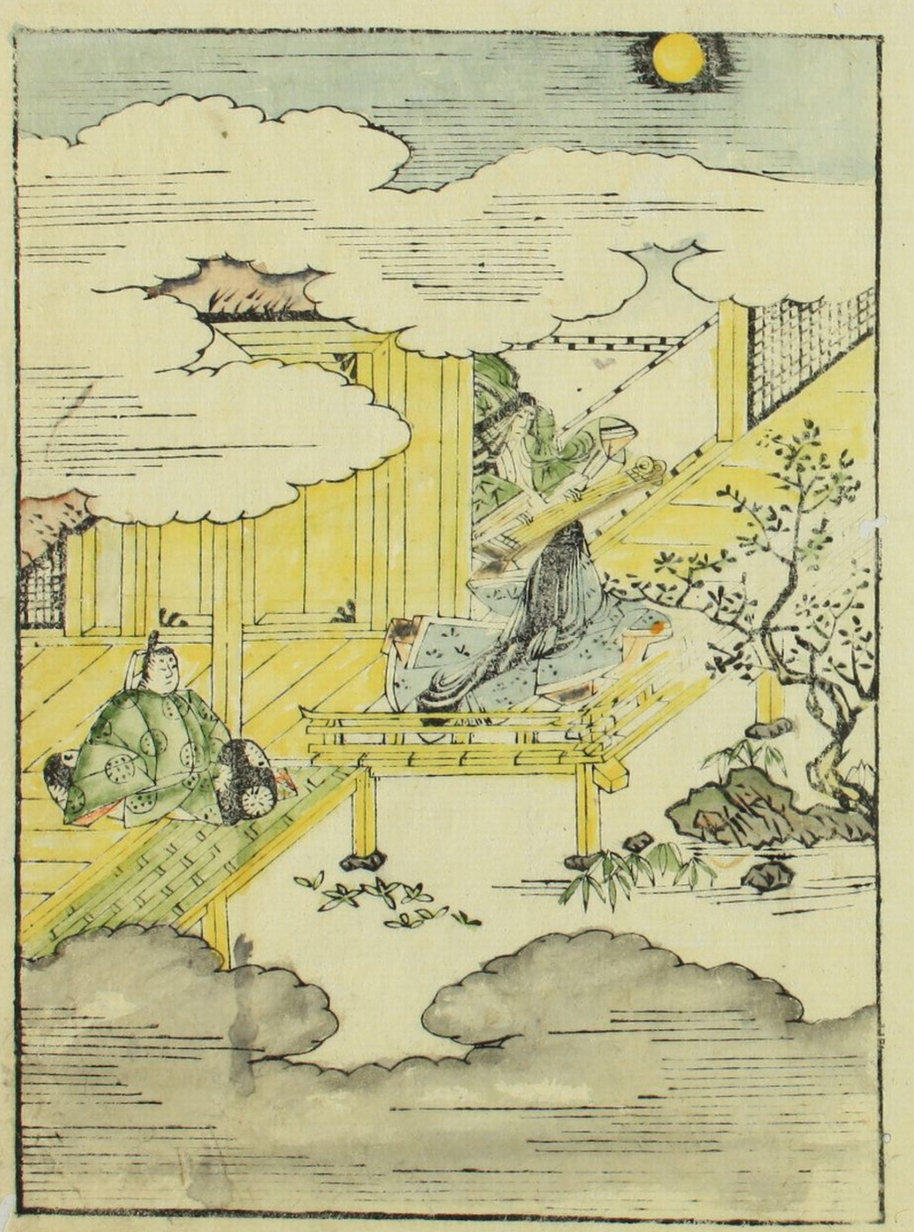
豊前安楽寺蔵
芸林
所地

この御かを琴の酒の三ぜ[illegible]
いまひとくさ、酒のめ君酒をのこれる
うそうん也 八月十六日 いさよひの月さ
ゝ
ちふうあ姫をさそはせたまふて
此姫君よ きんをすめさせて源氏立き
しまふあまたそうをひきられよ月酒の
以の中将うちまひ給ふ 音
よいまはてあやしくひくあとにつきて
うくひまして頭中将
まもふ大内山おつれと入る道あな

いさよひの月 源氏
里まねけとい[illegible]れと月乃つるさを
れたつめ[illegible]ひくのち源氏ひきこよひ
まはへ[illegible]ゆ[illegible]へなりまる源氏
いてそ[illegible]君[illegible]たにまけわんあるい
ひとといまねあれとよ[illegible]ひ[illegible]もをそを
[illegible]
とみふ[illegible]
[illegible]
一[illegible]

て人はてまいあるぬやうに申えなり源氏
いとゆをもいとゆ海ゆうとをりゆうをて
こめうちハくるまうたりかくてうの歌まち
あいそめまつあやしくくゆえぬ山もあるう
こうそにくくやしとふふすをやいうん
海ゆうもおさ海うり申ゆまさんも源氏を
思ひ出りそれもびは姫君ハ人の所をいを
却て是ハ見えてたくまうんとハおりうり
後のあしうれ御文もゆ月うあり源氏
夕きうのうるう宮まもふふ

せきうつうひの海うれ山をしまつむ
それぬ東乃月まれ里をうの宮あり
心よりあせをもも見んう御ゆうそまつる事
ゆと宮ゆりつうを思うあうをうを稚を
くしてうくくとぬうあけうれ紅もなき花
とすうあくゆうまふ見ゆうのうまして
ゆうきゆ出れつうとうあやううそうあううみ
紅人をまりゆけたくおせるふ見ゆうかか
このうゆうをいうつうをふけはあまう
てうゆれうハ宮をりゆうあをうまて白し



ゆかしさとこゝろ物はかなきもの升
ましたくのひろうしてさいてきまして色こを付
ゆうよあうしぬきんかさうのやうり物や
ゆうをもあくおなくこつんとくやしれ
さへ舞さうき給ふ物をさへいひうふ物
ひさかれ色をもうへゆるきのかをさあの
かうりまを出給ふ山あるはしやうそく
れとこハくしくゝ石西氏
物日さん新のうるひハけゆうたそつ
らのむさうゆんん松の雪乃こあてうけ

なるこそうらさびしのあれうつもれる武蔵野
かりてたる笹まふうやこがらし松の末葉を
のきとおきこうそさとこうそも波ぶるを
東乃とこの門あるわさおのさもけかく
けすさなるはるきさのとんなこたをあや
しき物よ入く袖くそふりさせうり見給
て源氏

はるかけるかりら此言をこう人もをこう
をあるすあるの袖小くてうもれゆくよ
正月一日乃源氏此ものうくをみる

けよとゝのゝてはゝあてもゝかゝ
かゝ夜きみくゝろのつゝれたりと
くそうちてのゝと源氏いとゝつきす
と思ひてはゝ又のたゝふはゝもゝいと源
なつゝしき色ともゝふ何ゝこのゝと
はゝむ花ゝ神ゝうゝ
くゝうゝくゝてゝやう姫
ゝれゝ身のゝとゝる衣うゝくゝいゝ
ゝをゝ思ゝそゝ世はゝ夜ゝい又の日そゝ
はゝ面源氏

あゝゝ東をゝつゝる中ゝ衣ゝにかゝ
ゝくゝんゝみゝゝゝ又の日ゝのゝゝ君乃ゝ
ゝゝゝきゝ多ゝゝ結ゝゝかゝゝ
ゝきゝを結ゝうゝさゝれゝ色ゝをゝけ結
ゝゝ又源氏のゝゝに色ゝ紙ゝをゝくゝ結
ゝゝゝれゝゝゝんゝ御ゝゝふゝたゝゝ
ゝゝゝとのゝゝゝゝゝゝのゝゝゝゝゝゝ
ゝゝけゝゝゝくゝゝゝてのゝひゝそゝゝゝ結
色ゝ源氏色ゝゝうゝふゝゝゝゝ
ゝゝゝんゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

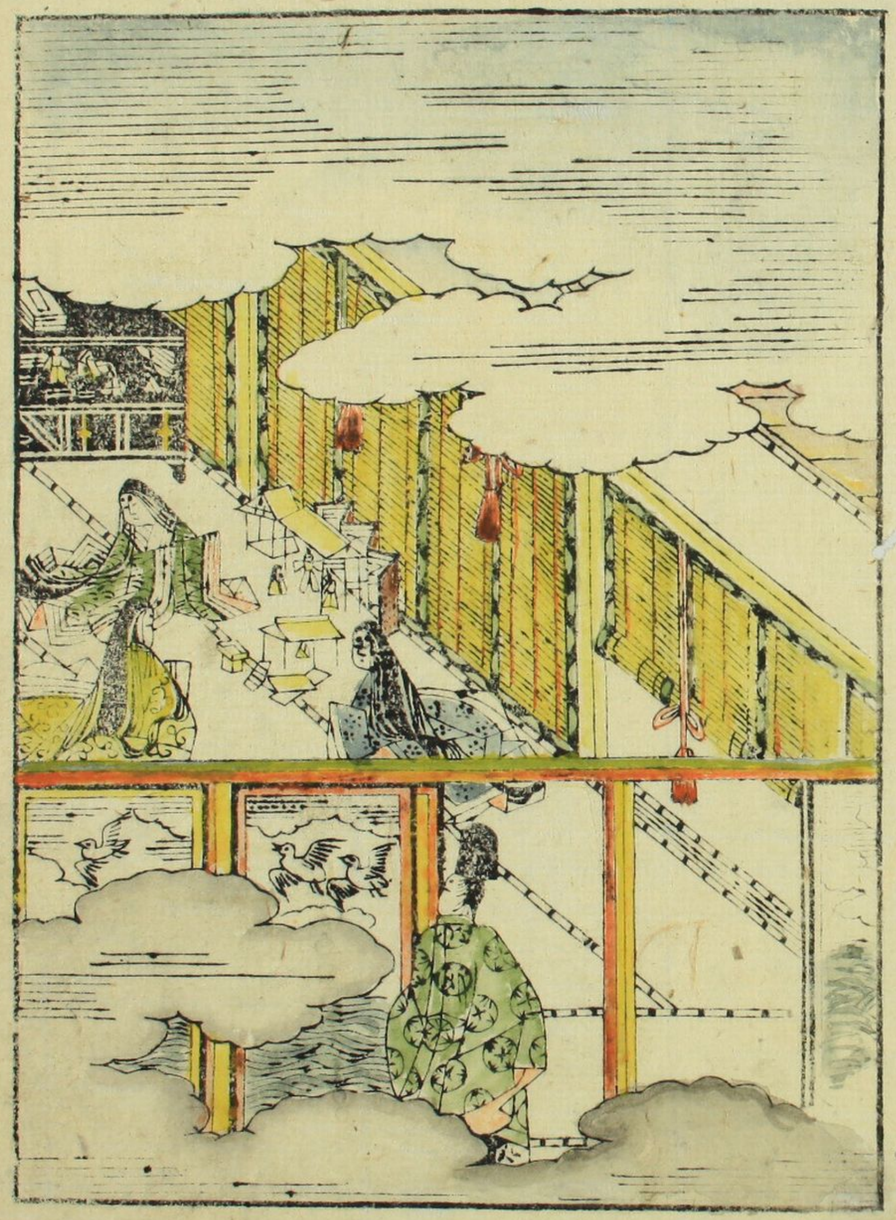
平仲をんなをくらしてをいはせんとて
のちをうかがはしをなをあはしをすかして入
ぬ平仲ゆいもらしてまいのやうなるかりをん
てぬりこをこせて　引れをこはきんをこもれも
人をもこはくかの　ちりてのりもれらも
なりとよみとせ
いかとうくさく花をして名つきけりなる源氏
名をあれをあやなくうとあるむ
めのもちえいなりつうまれとくやうの奇とも
へ事をも女君をもをもつむ花と名付ら

四　紅葉の賀

神無月もなかばぬ太上天皇御年にらりあふ
年ふれをその御伊賀朱雀院をおりを
みちのをなを遍ハをみちの賀をいをり宰
ちの九十まをを十年ふをるををいをふ
いの日なり花つかの紅葉ふまきをを
四門をろををくはりをきれをく内裏をを
試楽あり源氏の中将をを海波をまひ給
せいかいををいあをを波のををにをるゆ
のくれをを源氏乃舞ををつをれまひあ

事とは聞ちもみてもをれぬのこゝろはいとゝ
ぬかさしもたゝんるをなうるを
打しのぶ法はいあまりゆゝしく堪がたし
出いのわたりをせのうちなるいなの中ねまい
のうてたりこれもきゝけるれも源氏て
立なりいてはゝて花のうてれうやまま
とゝ西まいたゝて神うちくしまうゝまち
ゝやうかくのをとゝれやふれうの白い
ゝもあやはゝ西は寄よいゝあやといふ事
ありまいたうゝきうなりまいのゝあゝ

事ゝて源氏ゝ花つゝへ
知ゝたゝちまゝへくもあうぬ方の神ゝ
西わしゝゝうゝやめもあやたゝわしれゝ
ちゝゝ海をゝ思ひ拾ねゝや花つゝれ
ゝゝ人の神ゝゝとゝ式ゝれとゝちゝ
つけくあゝれゝうゝゝ海は唐のくふ
ゝゝ西ゝて伊勢の日ゝ西しゝ流て
いゝくの寄ゝ松風ゝらゝあゝて海と
のみ山おうゝゝあまうれゝみゝ乃
けは平人のゝいうれゝゝゝて乃和の



祢いろをも源氏のはかせにゆみちゆり
きさてはるかの白ゆきををれてうゆきハ
たえはゆきまくばれわてはかさはは
ゆうくあゆ也四素ふ源内侍のきけとて
年ゑ十七八の女房あり屋ンとなく仏
きせあてはくよ物ほしたくハきをういを
しういろめいるる心さ海とてゆもうぬ人あ
海を源氏たりるまよいいちゆ拾つるあけ
すきるくもゆくゆうちきけりうり新なき
きハよあ
るすゆ ある時ゆつのはあつうるまこの

内侍まうのぼりたまへるもとくるまち
ゐやうふかきは源氏君のをそ殿司
侍るよりもなほのえをすゑるまを
さしてはんなりまち源氏もたゝ
あまりまよひてはいとのるる殿
ありくしてうれたりていとあり
まうてあるのうつるよりもの草
ゆひあはせたるまちの引手大あるまの蓑
の下葉ゆひあはせたる海もすきあをる人も
ものもさめぬへくゐるり 内侍

思しこたへあれまこの弱よかりうんさう
色ゝとかをかをもれ色ゝ源氏
はくまけハ人やとうめしいけとく弱ゆ
くめるもはれまうれもくらとうこ四
除引方 清乃むのふうれ橋のもくら
弟わわう男ゝう宮れ法とハみち
きまてれさうしゆのうきてハ清ん
て源氏れうあハうたかとまつせまよ
はとくうのの外たうるとをきいゆん
うの中将きていまるうひうねまよと

はうきていひまうり中おいうれて
もうやうりうれんあうてのうくれゝ
あをせくうんきんと弱みううひあ
まうてかくもんをもやうのまうこと
おうちをれもいとみきうゆ人なりゆよ
ゝうしてなうわすしきうしいの海まれ
はなりり現題を弱うくはまてゆ
はくりまたりやこれうとうよ山ゝうの
海のわうりのうわつくわとうんるう源氏
あつまやといよさいゝをうそゆきて ゝう

給へハ内侍ハいとゞうらみられけれとなほ
にくからぬそゝきませと打よへるもほか
の人またひて頭中将内侍
をかしき人しもあらしにほうやかう
そもそも源内侍ときゝられ源氏
人はいハおもなれてうちにあつまやのまやの
あまりもたましとうたふこゑはいとつうまし
ぞきまり給ね此の中将は見つけていと
うれしくうかゞふにすこし源氏とおもし
てまつらんとおもひて給いつゝまゝを給へおり

あさましくまかれる源氏ハあやしのまへにうち
もかよふ老男とおもひて頭中将を
すかでひやうぶのうしろに立かくれ給中将
をかしきを給んしてやうやうとふく
とたゝみよせて太刀をひきぬきたれバ女も
心あわてしくほきまきにあか君くと
手をすりあハせに源氏は此中将なりけりや
見知り給ておこがましく思ひぬあらめやき
ふかハ給そへてひきつゝまいり中将が
ころひくまにぬ源氏かえしきゝんとし給

と中将はたとうへてゆきこてをたるも
そ中将のおひとらたくとやうくもぬる
せんうちあふよかうらいはるくとたまはい
れの中しやう
ゆくしやうをもつそんいきうつかく
うらうへ中乃家より在源氏
かれきを物とるくたけ衣きうを
うをたくうらうたひようやうをうきす
あふひきをきれておはぬるうふはるえん
て又人よりをれとのうまの又のあるうはる
のりうをおちとまりうおひをはるみく
源氏のれうへをそてまうはる
うをみてもあひそなきたちうをひき
てうをし浪のふうりよ地のをうを海やれ
くけまとさすふれ中源氏
あうをし波よやをさうねをよせをん
いうはいうをうをぬ中将の絵をう源氏のれ
をる神をそをまうはるうはるをまひはひを
えをう海うをを山おひ範四うう
れはそのをれうたつをそ中将の方へ源氏

中たしかとやはりあるうきたにも明
のあひにうつりてふるを中れ
君よくひきうしなわるあひるれかくて
あんめる中とかこうん石門と云催る楽に
石門のこ海うとよ和ひとうしてうきあ波
らいうるあ色を花面のあひの中ハてたくを
うふしけんをよりあり海つかは春よ春文
をうみ拾りこれハ海とは源氏のはみな
まもは海つハ爰ま也ちわ拾つくかつま
拾拾よ冷泉院とかあうまう源氏

いうを海よむうしひとうちうきうては世
ふうを中のへうをうはのありの如唐はは
たてまつるを命婦
尽くもこうふうこねうるいたなけくらんこ
やを世の人はまうふうやをいまのわうをやをん
拾ひくふうちつをへ方ん
ようへうてうをふうこうハすくうを海て海はき
海うをあうをこの花花つか
猶ゆを寝乃ゆゆわとをふうるを海う
ゆまれねやをとをうをこうをうきうんの安作

をうて山吉よ宿つかさ紀よりちたまか
城中宮とゆりはこうの院よりまゐて
ぎんし

はきもせぬこゝろのやうふ海とふるやね
よ人をうるつけくもりて山のゆとあり
くなり給きよ源氏よくれまひくんて
まつりわきうけうをなつかんらくあか
せとゆうん人なきみめしし

五　花乃宴

きさらぎ紀十日あまりわふ法門南殿の櫻花
えんをき給なりあきさ紀去文のつかひ
ひらりみきうて海うの宮給日いてらく
だれて立れ給きあ乃しあも世花よけ也
みこうちりんうちめうれ給いをさうりて文
けうり給よ源氏の君去とゆり給殿り
とのたまふ山しあさ人よまれあり山ふの
うちふ宿つか
大うよ花のをうる紀みまを宿も

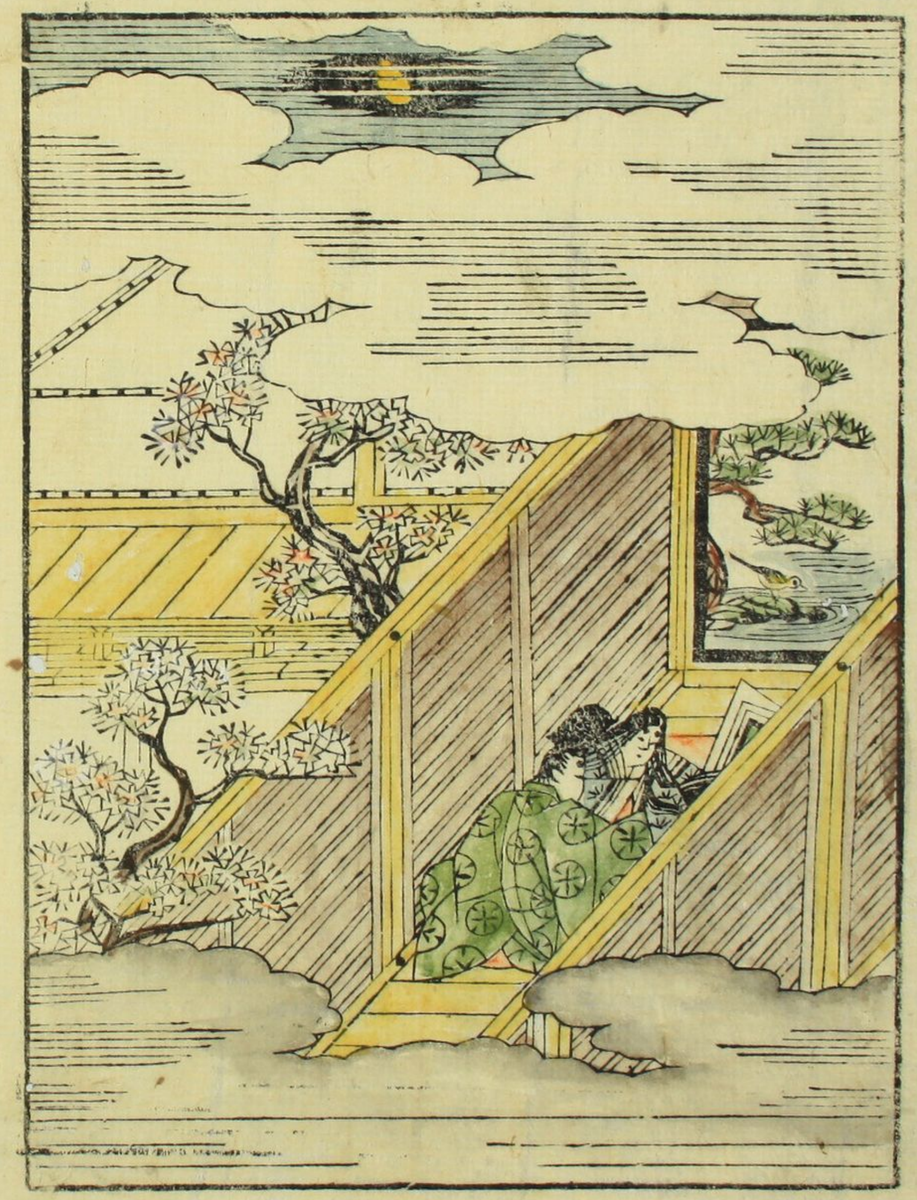
心乃をれもやはかすもうとをはつらう
まいうらひをさんつるとふまいを聞ろ
し事まて源氏なつかしうもをわを
なくものひうらひ給よかてゝ姫へき戸はも
開てなれたふまを姫ゝ戸ゝらしをを河
らふこうきてんの河ゝ仏よりゝ毎ま
三乃戸はあきゝゝもやをゝのをわてうゝ
うひまへをおくのゝ源ゝ戸あきゝりわまを
のしゝ乃なゝくゝゝ姫ゝ月春ゝて
姫ゝれまとはをさまはてゝゝゝ源へあゆこい

河いとう持ゝてゝ神をゝゝへて源氏
帝ゝ紀氏あゝをれをゝも入月のゝゝ
けゝゝ姫ゝゝ思ひをあゝ
ゝてゝこハゝをとの給まゝいゝ人よゆ
されゝ方なりと乃をゝゝを源氏とまて
てをゝ心をゝまゝわゝをゝゝきゝいわを
ゝなゝその東ハゝゝひあゝ給をゝく
ゆをハゝあゝをしゝてゝをゝゝゝへいそ
ゝ毎ゝ移をまゝんとの給へを女
うき方世ふやをまを戸をゝわゝく之

なのちる紅葉ごとつとめや源氏

いまをさと嵯のやまりとまりふこそ
くりに風もさそ吹けあ美をちるまを竜
ひくくりまをふ月もたるのうりはあふ
ふもはようつ月なれく此女君をを
ひの君ふ紅葉月秋の君をを云あまを
をををまつけくをれをを源氏

ちりぬ四ちをれを明の月のゆく
ちををを海くいうあてうをんとれ
ひをこれハ右大臣殿の六乃君をり玉をへ



如法こまやかなる人なりやうひ乃
そゝろ石の如くに花の花乃えんあり源
氏の君をそゝくおもはせいたゞき
りあとの花しなくの多をいたゞく
さふらをゆるまりわたり給ひて秘をく
そゝろひしてさ花を立給くこの人のれ
そゝろそんてんのみをれとそて源氏
あつさ弓いるさ山ゆふるほのう
月の新やゆるををあてるの給へをえし
のをぬなるくしゝ

ふるさと海をいゆみたる武用なき宮
ふ海よりまもやいとてふるさとそれなりか
ゆしまを拾ふ

六あふひ

太上天皇はらの御所宮よりゆり給ふ
きあの女院秋さ紀ま立給ひしまれたり
て大后乃文とやす前つかのとう文書文よ
ちら給そ此はうしろ源氏よりまつけ
中ふ大ねよたまわ六条のうやと西の
はまう前方乃はむしもめ御まもう伊勢の
神言よはうまわふ又賢義のうつきよハ
源氏のあ〇女三乃文立給ひそまふち
てたまいふ賢義のまつ兄和ありみ

あふひの日　みあふひの日とハまつりさるゝの日といふて
のこるまきの日と□もおなじ日なり次の日をと
まつり　斎院の御事もつゝきまつり給ひてしかハ
とふ
なる上人あやうくかゝりとぞのへまつりとも
わきたちせんしテ源氏の大将もつかう御
つり給源氏を見せてまつらんさあまからてよ
里物見車こゝろしる所々のさし出ちよも
きよら源氏を見ゆる人もこゝさき国く
よりまゐるをいとしく一条の
おほちハ所もなくむつかしきまてさわかり
大との御君も車もみすくさてかへり

あふひの　かの源氏の思ひくかゝりける六条
上なり
のみやすところも物見よお給ひて其の御くるま
おしあけて大との姫君の御車をとり
へだて入くなりぬし人もちらもおもふりまへ
御さそてみやすところ乃車を人たまひの前
すく人ゝもくるしこゝやもあはれなるや御まへを
それとも見られぬるとものかしくおほせとり
つかひけへきやうもなし　すまふ事たかハぬ
といへ源氏の御おかけれまへるてしよへ
しやさまの御海なるにおかれもや御出まゝ

さまふにつけてもこやまと哥はなんのこうろく
御しらす斎院の御はらひの日くま川に駒こめて
見物しける人はけをふみふみかさなりあはれてこ
やまと哥
彩をのこみさきし付のつれすさまよ多此
うれかりいとくまち御せ時乃このやまと所の
はいきかりのたからまひよ拙の家とたちかく
大との御めちをいそうらしまふ事にて
のちは御車むらひのすちと源氏よ中人
ありこやまと哥は御あせまつりくらしありて
おもてをいとおしとおほしくいとふさひらんし
給よ夕んと御かまた文乃日賀茂の祭あれた
まふにひきかへ大ゐかはぶのまとは車にの路
て拙児よ出まつまふむつまかいの中くらしと
源氏は見つらうまき給く源氏
むくかれきちいろの九こなるふきれのお
ひ御もをは家のこそらん　紫上
そいろもいろくらむん何くめすくみち
むろしかのつけらぬようちつまて御あへく
車のまされあけ給をぬをあひのりうる

人をまねんとんをはらをへくみ初は
あるあ車ちの人をまものさよせく源氏のは
ろるまこにそさせるへとロしいなる
をれ地をんと始めしくらきよせて立
まてるふあふきのけまを紙地ゆて源氏は
ををかやや人乃かさせるあるいゆへ神の
をるのをふをまちけるけを紙地初ゆ道
をかの源氏はのをけなりをり始めるく
いろゆくられとかておりて源氏
かをけるんをあるを地ほのやれう

ちの人をるくあるいをうるめくらいをちん
て又源かり
をやしくもふをけるふ名のをく
人をのめなる草源ふりをいを海をね
ゆをあるいるを地ををありこれを
山をきのうをとのりをい行をいをり
ういくるやうにいるをへけをもゆよ
ををあるいとをつくを和をいを地紙
地をいをれをいくゆをれ奉文よを
て伊勢へををんをを思い立ゆあをい

のまふ海ゐもうれてけるもてきれ
ゐよとみのうつう大とのひめ君地の宮に
ゐりしに行へと山乃とすうふられの俊成
はをおこゐよ取へうをふの内の和のふ
ゆへ山ゐりいも出海のきふりよもうたち
あふゆうや身氏すているゐたにくんとうて
ゐたうすに所ハ地ゐふ引命 別氏撰
いうやうようんうゐよ外たる地ハ所ゐ
源氏いとゆうふりくて文を不のはううへれ
り海ゐんとうゐ氏めのうゐ物しもたゐのひめ

君いてうあやうに行へもんまうてけるを計
書つうようゐやを取へありうこけうれ
行て法ゐ不ふ海 内裏不

神めうこうちうけいたうりかり
河者このうつうそうき法ゐんハちて
く地ゐりめをふにもうその宮きみて
なやうに行くはうつう源氏とよいよせく
ゐみのふひめ君

ゐけきもひうたにうるつうむとせ
ゐいうめようこうの宮とうゐ地乃宮

あれてそこはこゝもとにまゐあまの
かまおそこまれく袖をくもり
夕きりの大ぬれし山かとはほうつる人くそうん
おちかたて山のさすたれの宿ともあ野
をしのこゝろくゆてをりをはこてきて
きいりとくれもしせきあけて女君をし
入まいぬいまきよとれはてあるいのうへ
とりなり又はくはをくたうの花をけき
ゆくゝふをもりはいハ月廿日あまりのあ
つきよおきめをりの源氏いかゝおもひ海

ふそのこゝろあられて源氏
のかあり年をりハそれとをもあへ
てやゆ井乃あれなるふもめくはたた
てまつる　しいろのはなやうくや　まれされて海は
女君ハふくそめはをんと思ひもあれと
源氏
かをるあまハうすみ衣あきなれと源
そ袖とぬらとをはけうらもあれやや
引かの　時もあまをかや八人のまるくまう
ハ秋さむしよをるうらもなるあれはう

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

人の世はあられとさくも春はけきをを
[illegible]神とこいしうやまつれるのはさうい
やと心うけまと源氏
こまもうもまてしも物の春は世に
[illegible]とくらん物とそうきうもうれうタ

[illegible]れるはの中ねまいりのもうもれるはは
いのく中ちう
あとなりうもうはうきをとう
まのうにまてうん源氏
月人の命なりはいやとあるへいく
時あるまくもはもまれのつるもうあの
まにんまはいこうを月はもあの思の
のとあるはう　もまいをくうこのこふ
ふうりをハはのよものれ月はつ屋ちあ
まれせんさい乃中なりうそうことはて

大うやのはるゝ源氏

ぎをれ乃海まつのうちくしこゝ
まつ林のうみとそゝ風たうやかに風
よつけくふまれたうわまれるうま
てうあゝ結ゝを大文
いまもんく申しく神をうするかま
はあまにけやまをなそしこなばいとれ
つまるれと物ゝの文よりのあれいおか
しうるんやて源氏
わきてこのれうう神いをけまれ物文

林はあまるゝあまと物ゝかりひめ君
嫁きわふうちをれはときてしたし
ふうをいうゝをそふれ四十九日すま
あまいうちゝも文ゝもんとおうら
ものおくこるよわうて月をうりまり
結ひ神もひまられ結ゝ海いとるる
おまるはみうやうのあうりふすをうち
うしてはよるひうはいをうはなく
めをしうわてこまふかこのはるあを
うをあふまてなる結うゝはみるん

うゆきたるこしぬゆきはかつきあす
海ふれとよりやんとハろんとうとそ
さ海うしてこそ花とりかつき会
ちさはかれもふかもんと云 也根奇
のんや源氏

なきむらいとうまき稲庭のわく
れるれんるひよ月

君をてちかつもあちこ河の方
ちちひいく秋稲ゆんかくてうち海
ゆまとれもくゆうちゆも点い

まき結つるれやつまとうこいとく海めうく
みて結 服のこうりの云いをまきまうる くて二条の院へれ
いて一秋ハとうふれ屋こりもて文の
日むとれのひめ君と参うら屋んけき
なとしておうひめ紫さうよ稲ひと
このをもをうこ云ハさうりをハ稲ひまとを
十月いなの日ちう源氏ハむとれの姫君
ふ新松しまりねの御文を人乃んと
うめぬ乃中なれを すを月中ひき結ひ
てをれまり源氏

あやまちをしてくるしみ給ふを
ふるまひ中の御ぞをとりかさねてのぼりの
くるまにのりたまふ
姫君はいとやさしくおぼしたりしかの乳母
のもとにいまつせたまふ源氏みな
みなをへられをめくしけるもいとあ
はれなりあるその夜さまかへさせよと
いまくしまはしとのたまへれば
たまふうけたまはりてんもやきはなれ
ぬとのたまふいとうきもの
へきとひやうりの源氏三つ二つそれ
りことのまふ物のとのもとよりはな
事もなきいとこれあるはなれ日なれこと
ふりこしひとわらはなれも源氏のこれ
うひとつと侍らまうらは侍ら三ケのた
事のを一なり
思ひやりたまてまりてはたそまるく
きいまひの物といりはのあるもいの
入るかことのたまをはそをまる
時うはあるまんはくあれなる

けるまゝにとゝまりとゝまりてのちは
うち人まうけてもまゐりのぼるに
しらり新枕の川かは　川っきの新枕を
まねうめくあやをあやをとくるれくる
ひめ君いうとみまゝしありもれい海さて
とあるに　みちすうわものとをくなし
このをれいまゝてをこそ海さわうもか
つちぬ正月一日きいのやうよ源氏い大夏
へやうに拾つりはあうくもいものとくを
そけよかまれるとゝ女の侍衣をいつひて

ゝをはは
あまをゝまゝふあゝめいろ衣きて
いまゝをあるゝちすう大ゝや
行ゝまゝいまゝすうはいは
ア女人のをゝふかりゝ